

# 金輪仏頂法を修めた舍利容器について

内藤 榮

はじめに

醍醐寺周辺の寺院を中心とする真言宗小野流は、平安時代から鎌倉時代にかけて舍利法と宝珠法に主導的な役割をはたした。同流からは範俊、興然をはじめ舍利法と宝珠法の教学研究に秀でた学僧が輩出され、また重源や叡尊など醍醐寺に学んだ高僧が鎌倉時代の舍利信仰に大きな業績を残したことはよく知られている。とりわけ宝珠法は小野流のお家芸的な性格が強く、中には嫡弟だけに継承が許された門外不出の秘法もあった。

ところで、小野流の内部は舍利の解釈をめぐって大きく二つに分かれており、互いに強い対抗意識を有していた。一言で言えば、解釈の違いは舍利と宝珠との関係をどのように考えるかという点にあった。まず、醍醐寺を中心とする醍醐三流（三寶院流、理性院流、金剛王院流）は舍利と宝珠を同体とみなしていた。同流では舍利法が単独で行われることは基本的にはなく、舍利は宝珠として宝珠法においてまつられた。今日、真言寺院を中心に宝珠をかたどった形式の舍利容器（火焰宝珠形舍利容器）が数多く伝わっているが、これは醍醐三流の、あるいはその流れをくむ流派の宝珠法の遺品と考えるこ

とができよう。

それに対し、勸修寺を中心とする小野三流（勸修寺流、安祥寺流、随心院流）では舍利と宝珠とは別のものと解釈され、舍利法は宝珠法から切り離されて単独で行われた。ただし、小野三流においても舍利は舍利本来の姿である釈尊の遺骨とはみなされず、舍利は一字金輪（金輪仏頂）の種子ポロンに姿を変えたとする解釈が行われていた。そのため、同流の舍利法は金輪仏頂を本尊とし、作法は金輪仏頂法のものを取り入れて行われるという、およそ従来の舍利信仰、釈迦信仰とはかけ離れた内容となっていた。

筆者は先に西大寺所蔵の鉄宝塔および五瓶舍利容器について論じた際、この作品が叡尊の住房で行われた金輪仏頂法に用いられたことに注目し、叡尊は醍醐寺出身にもかかわらず小野三流の舍利法を修めたことを指摘した<sup>(1)</sup>。その中で小野三流の舍利法が行われた目的や道場の様子、そして拠りどころとした経典について論じたが、同流の舍利法の遺品については西大寺の鉄宝塔と五瓶舍利容器を挙げるとどめた。しかし、それ以外にも金輪仏頂法との関係がうかがえる作品は少なからず散見することができる。本稿では、管見の範囲で知りえた小野三流およびその流れをくむ舍利法の遺品を取り上げ、従来顧みられることの少なかった同流の舍利法の具体的な姿に

ついでに見てゆくことにしたい。

## 一、小野三流の舍利法について

小野三流の舍利法については既に別稿において詳述している、ここでは同流の舍利法に用いられた作品を探し出す上で必要と思われる事項、すなわち所依經典、道場の莊嚴、および本尊等について述べることにしたい。

小野三流の舍利法は『大陀羅尼末法中一字心呪經』を典拠としている。本經は勸修寺流祖寬仁（一〇八四～一一五三）が保延六年（一一四〇）に弟子の実運に舍利法を伝授した際に引用しているように、『秘藏金寶抄』卷一〇「陀都法」、小野三流の舍利法にとつて特に重要な經典であったことがうかがえる（後述）。寬仁が引用したのは次に挙げる部分である。

告諸仏子等。汝等今善聽。我今說。此呪具足諸功德。当來惡世時。我法將欲滅。能於此時中。護持我末法。能除世間惡。毒害諸鬼神。及諸天魔人。一切諸呪法。若聞此呪名。皆悉自摧伏。我滅度之後。分布舍利已。當隱諸相好。變身為此呪。仏有二種身。真身及化身。若能供養者。福德無有異。此呪亦如是。一切諸天人。能生希有心。受持及供養。所得諸功德。如我身無異。此呪王功德。我今但略說。（下略）（大正藏一九一三二六）

これによれば、惡世すなわち末法の時代がおとずれ仏法がまさに滅びようという時、この呪（金輪仏頂の種子ボロン）は諸々の功德をそなえ、末法をよく護持し、世間惡、毒害、諸鬼神、諸天、魔人を除き、一切の呪法はボロンの名を聞けばことごとく滅びるといふ。

そして、釈迦（文中では「我」と見える）の滅後に舍利が広まったが、舍利は諸々の相好を隠し身を変じてボロンとなったと見える。また、仏には真身（法身仏）と化身（応身仏）の二種類があるが、よく供養すれば福德には差違がないとも説かれている。

右の引用文において注目される箇所は二つある。まず一つは舍利がボロンに変じたことを説く部分で、この説に則り小野三流では舍利をボロンと同体と見なし、金輪仏頂を本尊とした舍利法が行われるようになったと考えられる。二つめは法身仏と応身仏との同等を述べた部分で、これは大日金輪と釈迦金輪という二種の金輪仏頂について説いたものと考えられる。すなわち、金輪仏頂には法身仏の大日金輪と応身仏の釈迦金輪がある。大日金輪は金剛界大日と同じく智拳印を結ぶ菩薩形で表わされる。蓮華座に結跏趺坐するが、座の下には伏した七頭あるいは一頭の獅子を表わす場合【図1】と、大仏頂曼荼羅の大日金輪像のように獅子を表わさないものがある【図2】。釈迦金輪は定印を結び蓮華座に結跏趺坐する如来形であるが、頭上や体の周囲、印相の上などに輪宝を表わす点に特徴がある【図3】。



図1 一字金輪曼荼羅（重文、平安時代、奈良国立博物館）



図2 大日金輪像(重文・大仏頂曼荼羅より、平安時代、奈良国立博物館)



図3 釈迦金輪像(重文・大仏頂曼荼羅より、平安時代、奈良国立博物館)

密教では応身仏のひとりである釈迦如来の遺骨舍利を大日如来と同等の法身仏の境地にまで高めるため

様々な解釈が試みられている。たとえば、醍醐三流では舍利と自体とされる宝珠を金胎不二(金剛界と胎藏界を合わせた境地)の存在とする解釈があり、また舍利を大日如来の三昧耶形である五輪塔に安置することもしばしば行われた。これと方法

は異なるが、『大陀羅尼末法中一字心呪経』において釈迦金輪と大日金輪との同等が説かれたことも、釈迦如来を法身仏の境地にまで高め、舍利を密教大系の中核に位置付けることを意図したものと考えることができよう。

さて、小野三流の舍利法が修められた道場の様子をもっとも具体的に記されているのは、次に挙げる『秘藏金玉抄』巻一〇「陀都法」(大正蔵七八一三七二)である。これは寛仁が保延六年(一一四〇)十二月十六日に弟子実運に舍利法を伝授した際に、実運本人がその内容を書き留めたものである。

#### 陀都法

大陀羅尼末法中一字心呪経云。云何名為一字転輪王呪。即呪曰。  
此是梵本上部臨去声。此是唐一字之呪部音彈舌呼之。 ○爾時釈迦牟尼如来觀察一切清淨天宮。告諸菩薩摩訶薩。及諸緣覺声聞天仙諸大衆言。汝等諦聽。即説頌曰。○分布舍利已。当隱諸相好。變身為此呪。仏有二種身。

眞身及化身。若能供養者。福德無有異云云。

種子。五。三昧耶形。陀都。

尊形。釈迦金輪。印。金輪印也。

眞言。一字眞言加婦命句云云。息災行之。

部首大日。本尊。可懸釈迦金輪。壇中心安舍利塔云云。

香藥等口伝。相伝云此法殊益末法衆生。現世当生求願無不満足。

次第口伝事等努力努力不可忌授非器衆生云云。

保延六年十二月十六日授申已講了。

此判寛信之判云云。

在判。

前半は寛仁が『大陀羅尼末法中一字心呪経』を引用し、舍利が五(ポロン)に変じたこと、および応身仏と法身仏との同一を説いたことが見える。続けて舍利法の作法と道場の様子が記されており、それによって本尊として釈迦金輪の画像を懸け、その前に大壇を築いて壇上に舍利塔を安置したこと、種子、印相、眞言などの作法は

すべて金輪仏頂のものをを用いたことを知るができる。

筆記した実運自身も師の寛仁の舍利法とほぼ同じ作法の舍利法を  
実践している。実運の口説を筆記した『諸尊要抄』（大正蔵七八・三三  
八）によれば、実運の舍利法は釈迦金輪像の画像を本尊とし大壇の  
中央に舍利塔を安置して行われたという。寛仁が行った舍利法は小  
野三流の僧侶たちに踏襲されていたことがうかがえる。

以上述べた小野三流の舍利法の特徴を踏まえ、次に同流の舍利法  
との関連が想定される作品を挙げることにしたい。

## 二、金輪仏頂法を修めた舍利容器

- 1、宝篋印塔嵌装舍利厨子（重文、嘉禄二年＝一二二六、奈良国立  
博物館所蔵）

正面と背面の両方に観音開き扉をあけた木製黒漆塗の厨子である。  
現在基壇に軸部をのせるだけとなっており、屋蓋は失われている。

正面の扉を開けると奥壁に装着された金銅製の宝篋印塔が現われ  
る【図4】。塔身部に水晶をはめた丸窓を作り、ここに舍利を奉安し  
ていた。背面の扉を開けると奥に慳負板（取り外しができる板）があ  
り、その板の一面には釈迦金輪像が描かれた絹本が貼られ【図5】、  
もう一方の面には胎藏界曼荼羅の中央部分である中台八葉院の種子  
曼荼羅が描かれた絹本が貼られている【図6】。釈迦金輪像は蓮華  
座の上に結跏趺坐して定印を結ぶ如来形で、印相の上と光背にあわ  
せて十二個の輪宝を表わしている。

この厨子では釈迦金輪像と中台八葉院（中尊は胎藏界大日）が表裏  
に位置し、さらにこの両者が舍利と表裏の関係にあるという複雑な



図4 宝篋印塔嵌装舍利厨子（正面）

構成がとられている。正面と背面に同規模、同形式の扉を設けると  
いう厨子の構造からみて、宝篋印塔、釈迦金輪、中台八葉院の三者  
はいずれも本尊になりえたであろう。舍利（宝篋印塔）、釈迦金輪、胎  
藏界大日（中台八葉院）の三者は同列に扱われており、『大陀羅尼末  
法中一字心呪経』に説かれる舍利と金輪仏頂との同体、および応身  
仏と法身仏との同一が具体的に示されているのを見ることができ  
る（舍利と釈迦金輪は応身仏、大日は法身仏にあたる）。仮に宝篋印塔を  
正面にした場合その背後には釈迦金輪像が位置しており、寛仁や実  
運が行った舍利法の道場空間、すなわち釈迦金輪像の画像の前に舍  
利塔を安置するという構成が小規模ながらこの厨子にも見ることが

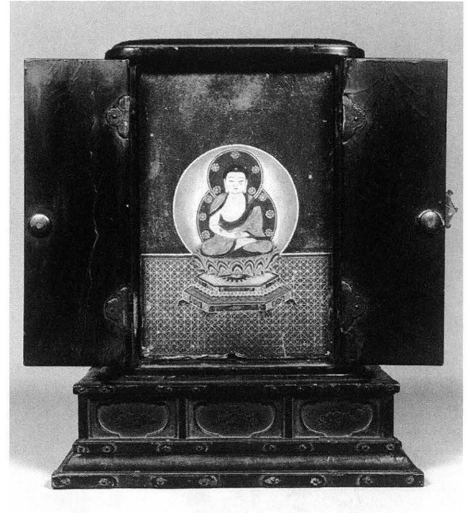


図5 宝篋印塔嵌装舍利厨子  
(背面, 釈迦金輪像を表とした状態)

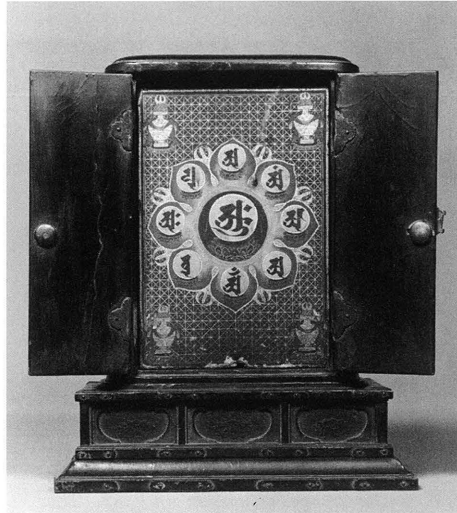


図6 宝篋印塔嵌装舍利厨子  
(背面, 中台八葉院を表とした状態)

経文を法舍利とみなし、肉舍利である舍利と併せて安置したものと推定される。

2、大日金輪像 (鎌倉時代、東京・根津美術館所蔵)

正面にのみ観音開き扉をもうけた、比較的大きな木製黒漆塗の薄型厨子である。扉をあけた奥には慳貪板があり、その一面には大日

できる。

なお、背面の慳

貪板を取り除くと

奥に小さなスパー

スがあり、ここに

法華経冊子八冊が

納入されていた。

そのうち巻八に奥

書があり、これに

よって嘉禄二年

(一二二六) 十月

三日に孝阿弥陀仏

という人物が母の

菩提を弔うために

発願したことを知

ることができる。

舍利厨子に經典を

納入した背景には、

釈迦の言葉である

金輪像を描いた絹本が貼られており【図7】、もう一方の面には如意輪観音像を描いた絹本を貼付している【図8】。

大日金輪像は智拳印を結ぶ菩薩形で、正面を向いた一頭の獅子の背に結跏趺坐する。頭光には五個の種子、身光には十個の輪宝がめぐらされ、頭光と身光および獅子座の大半を覆うように背後に一個の大きな輪宝が表されている。その輪宝の内側は赤く彩られ、日輪を意識していると推定される。獅子が一頭である点や背後に大きな



図7 大日金輪像 (大日金輪像を表とした状態)



図8 大日金輪像（如意輪観音像を表とした状態）

輪宝が表わされる点など通常の大日金輪像には見ることでできない特徴を見ることができ、これと合わせて近い凶像に『大正新修大藏経』図像第五卷（七六八頁）に掲載される「大日金輪」があり、このような形式の大日金輪像も存在したことがわかる。なお、像の四方には華瓶が描かれている。

如意輪観音像は朱色の衣をまとった通常の形式の六臂像で、背後

に朱色の月輪が見える。緑色の頭光を負い、台座は緑青色で金截金を用いて筋を引いている。頭上には飛雲にのる三弁宝珠を描き、その向かって右に日輪に愛染明王の種子ウーン字を、左に日輪に莖状の台座にのる宝珠を表わす。大日金輪像、如意輪像ともに傷みが顕著であるが、特に如意輪観音像の面は補絹、補筆が多く認められる。このことは、後に述べるように本来この面が正面とされ、礼拝されていた可能性の高いことを物語っているのではなからうか。

向かって右の扉は内側に不動明王坐像、左の扉は内側に愛染明王坐像を彩絵している。不動明王像は瑟瑟座に結跏趺坐し、右手に宝剣、左手に輪宝を持ち、頭頂に宝珠をのせる。頭光と身光を有し、背後に月輪を表わしている<sup>(2)</sup>。愛染明王像は宝瓶座に坐す通形像であるが、通常持物を持たない左第三手に宝珠をのせている点に特徴がある。

管見の範囲内では、不動明王と愛染明王を両脇時とする尊像は経典類に見出すことができないが、平安時代後期の醍醐寺において如意輪観音、不動明王、愛染明王という意楽（いぎやく）<sup>(3)</sup>（儀軌にとられない自由な発想）の三尊形式が成立していた<sup>(3)</sup>。この三尊形式は、醍醐寺三宝院の祖師勝覚（一〇五七〜一二二九）によって始められたと推定され、その後同寺の勝賢（一二三八〜一九八）はこの三尊を本尊として「三仏如意輪法」という修法を行っている。また、西大寺の叡尊（一二〇一〜一二九〇）は正元元年（一一五九）に『如意輪不動愛染三顆宝輪華秘法』一卷を撰述し、翌年より西大寺において「如意宝輪華法」を行っている。書名より判断して、この法も如意輪、不動、愛染の三尊を本尊とする宝珠法（如意輪宝珠法）であったと考えることができる。

この厨子の場合、如意輪観音像の面を表にすると尊像構成は如意輪、不動、愛染という醍醐流の如意輪宝珠法を修するためのものとなる。反対に大日金輪像の面を表とした場合大日金輪、不動、愛染という三尊構成が現れるが、これはおそらく小野三流の舍利法を醍醐流の解釈で表現したものと推定されよう。<sup>(4)</sup>したがって、この作品は両流の宝珠法と舍利法を兼修することを目的とした作品とすることができよう。なお、本品は奈良・法華寺伝来とされているが、当寺の復興に深い関わりを持った叡尊が醍醐三流の宝珠法と小野三流の舍利法の双方を習得していたことは注意する必要がある。<sup>(1)</sup>法華寺旧蔵とは確定できないものの、この厨子が叡尊周辺の人物によって制作された可能性は高いものと推定できる。なお、扉に描かれた脇侍像が不動、愛染であることを考慮すれば、本来の本尊は如意輪観音像であったと考えるのが穏当であろう。このことは如意輪観音像の面の損傷が著しいこととも符合する。

大日金輪像には金截金が用いられるなど鎌倉時代の仏画の特色が認められるが、如意輪像と厨子扉絵は若干それよりも時代がくだる作風を示している。大日金輪像、如意輪観音像とも絹本の丈が慳貪板よりも短いなど不自然な点があり、既存の仏画を利用して厨子が制作された可能性も考慮する必要がある。

3、金銅火焰宝珠形舍利容器(重文、正応三年(一二九〇)、奈良・

海龍王寺所蔵)【図9】

豪華な荘嚴の台座を有する火焰宝珠形舍利容器である。宝珠部分を水晶製とするほかは全て金銅製とし、台座の部分は細かいパーツに分けて作り、それを組み上げている。



図9 金銅火焰宝珠形舍利容器 (全景)

舍利容器の構成を下から見えていくことにしよう。基壇は二段の六花形で、下方に六個の脚を有する。基壇は側面に蓮華唐草文や輪宝文を表わし、下段上面には高欄風に蓮枝をめぐらしている。基壇の上に反花座を置き、その上に一頭の獅子が伏している【図10】。獅子の背には五鈷杵の鈷部が立ち、鈷部の上には傘状に広がった六弁の華盤がのる。獅子の周囲には六本の宝棒がめぐり、それぞれ華盤を支えている。華盤の上には伏せた六角輪宝の文様があり、その上に敷茄子をのせている【図11】。敷茄子は四方に窓があり、中に一頭ずつ計四頭の獅子が表されている。敷茄子の上に五段六弁魚鱗葺の蓮華座がのり、各蓮弁は三弁宝珠を浮彫し、地には密に魚々子が打たれている。蓮肉の上面は面取を施し、周囲に八ヶ所切れ込みを作っている。蓮肉の外側にしべをめぐらしているが、しべは一本ずつ作られ、先端は平らに打ち延ばされている。<sup>(5)</sup>火焰は四方火焰で、内側に連珠文帯を表わし、外側は燃えさかる炎を写實的に描写している。宝珠は四方より火焰によって固定されている。



図10 金銅火焰宝珠形舍利容器（獅子部分）



図11 金銅火焰宝珠形舍利容器  
（華盤，輪宝，敷茄子部分）

この複雑な構成をまとめてみると、二重基壇と反花座の上に獅子があり、その上に五銚を茎とした華盤がのり、華盤の上には輪宝があり、さらに下方に獅子座がついた蓮華座に火焰宝珠がのっているとなろう。意匠に獅子や輪宝が見える点が金輪仏頂を彷彿させるが、この構成を金輪仏頂の道場観と比較してみると、次にあげる『別尊雑記』巻七「大仏頂法」（大正図像三一―一）に説かれる大仏頂尊の道場観といくつかの共通点があることに気がつく（同書巻七裏書に「大仏頂はすなわち大日金輪なり」と見えるように、大日金輪を大仏頂と称することもある）。

大佛頂如来拳印

壇上有蓮。成大蓮花王遍法界。其上有孔字。成寶宮殿無數莊嚴充滿。其内中央有七獅子座。上有白蓮花王。其上有孔字。變成金剛輪。變成撰佛頂王身即大日也紫摩金色住法界定印。其上持八幅輪。八佛頂八兢沙俱胝諸佛七寶前後左右恭敬圍繞。如是觀了加持七処。

すなわち、大仏頂尊の道場観は次のようであった。壇上にキリク字があり、変じて蓮華（大蓮花王）となり、その上に莊嚴を尽くした宮殿がある。宮殿内には七頭の獅子がおおり、獅子の上には白い蓮華（白蓮花王）が咲いている。白い蓮華の上に阿字があり変じて輪宝（金剛輪）となり、輪宝は大日如来の姿をした金輪仏頂（撰佛頂王身）に変ずる。八仏頂、諸仏、七宝などが仏頂尊のまわりを囲んでいる。

ここで金銅火焰宝珠形舍利容器の構成に戻り、試みに大仏頂尊の道場観とどのような対応関係にあるか見ることにしたい（舍利容器の構成と大仏頂尊の道場観を比較、対応させたのが図12である）。まず、舍利容器における二重基壇と反花座は蓮華の意匠で埋めつくされていることから道場観にみる「大蓮花王」を象徴しているとしよう。反花座上の伏せた獅子は頭数に差違はあるが道場観にいう宮殿にいう「七獅子座」に対応すると推定できる。獅子の背にのる華盤は道場観に見る七獅子座の上にある「白蓮花王」にあたり、華盤上の輪宝は道場観にいう阿字が変じた「金剛輪」に該当しよう。そして、道場観では金剛輪が「撰佛頂王身」すなわち金輪仏頂に変ずると説かれていたが、舍利容器における四獅子のいる敷茄子・蓮華座・火焰宝珠という構成要素は、まさに金輪仏頂の姿を彷彿させる。先に述べたように、金輪仏頂は下方に獅子がめぐらされた蓮華座に坐しているが、仮に金輪仏頂の本体を火焰宝珠に置き換えれば、舍利容器に見る四獅子がいる敷茄子・蓮華座・火焰宝珠という構成になる。この作品が造立された鎌倉時代後期には、しばしば宝珠は如意輪観音や愛染明王など特定のホトケを象徴することが行われた。たとえば、密観宝珠には立てた金剛杵の上に宝珠をのせた図像と如意輪観



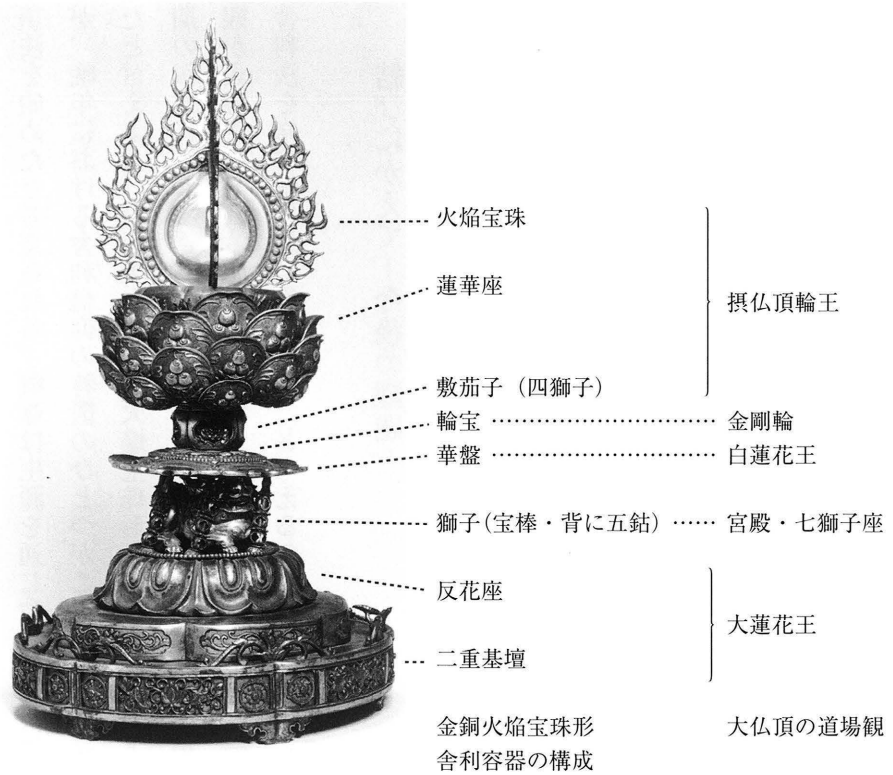


図12

火焰宝珠  
蓮華座  
敷茄子（四獅子）  
輪宝  
華盤  
獅子（宝棒・背に五鈷）  
反花座  
二重基壇  
金剛輪  
白蓮花王  
宮殿・七獅子座  
大蓮花王  
大仏頂の道場観  
金銅火焰宝珠形舍利容器の構成

音を安置した図像の二種があり、この場合の宝珠は明らかに如意輪観音を意味している。また、火焰宝珠を愛染明王に見立て、愛染明王の座である宝瓶座に火焰宝珠をのせた作品も見ることができ、同時代の類例に照らしてみれば、この金銅火焰宝珠形舍利容器において宝珠が金輪仏頂を象徴している可能性は十分にある。

獅子の頭数や、道場観には見ることでできない五鈷の存在など必

ずしも一致しない点は見られるが、以上見てきたように、金銅火焰宝珠形舍利容器の構成と大仏頂の道場観との間には偶然とはいえない符合を見出すことができる。そして、次に述べるように、この舍利容器を造立した時期の叡尊は、毎年正月に西大寺の自坊において小野三流の舍利法を修していたことも考慮する必要がある。

金銅火焰宝珠形舍利容器は基壇の裏面に

海龍王寺常住 小工白河守貞

大願主比丘實忍 小工室町道一

彫工七条昇蓮

正応三年七月日 大工白河行円

という刻銘があり、正応三年（一二九〇）七月に海龍王寺の比丘実忍が大願主となって造立されたことがわかる。また、造立および舍利奉安の経緯については叡尊の伝記『西大勅諭興正菩薩行実年譜』に次のように記されている。

八月朔日。届海龍王寺。新営金塔。而分法華寺舍利三十七粒。奉安置之。以為寺鎮。因又数法華寺舍利。其記文曰。

正応三年八月一日。海龍王寺新結構殿。三十七粒具数以採定之。奉請之後勘計之処。二千二十粒也。弘安四年勘計之時者二千四十粒云々。今十七粒増也。叡尊

これによれば正応三年八月一日、叡尊は新たに造立した「金塔」を海龍王寺に届け、法華寺の舍利から三十七粒を分け納入している。この「金塔」が金銅火焰宝珠形舍利容器である。叡尊はこの月の二十五日に寂しているから、この作品は叡尊が最後に造立に携わった舍利容器といえることができる。

さて、叡尊は弘安五年（一二八二）より自房の西室において金輪仏

頂法をはじめ、以後西大寺の年中行事としている。同七年にはそれ  
 にまつる舍利を安置するため鉄宝塔と五瓶舍利容器（ともに国宝）を  
 造立した。晩年になり叡尊があえて他流の舍利法である小野三流の  
 金輪仏頂法を始めた背景には、同法が特に外敵の襲来から国家を守  
 護するのに効験があると考えられていたことが挙げられる。この時  
 期は弘安の役が終わり、いつ再来するかもしれない元寇に日本中が  
 脅えていた時であり、叡尊はこのような時代の要請にこたえて金輪仏  
 頂法を始めたと考えられる。<sup>(1)</sup> 叡尊は生涯を通じ舍利信仰に篤かった  
 が、晩年における舍利信仰の特徴のひとつがこの金輪仏頂法であっ  
 たと言えよう。海龍王寺の金銅火焰宝珠形舍利容器はこのような時  
 期の叡尊によって造立されており、しかもその構成に大仏頂の道場  
 観が表現されていることを併せて考えれば、この作品は小野三流の  
 舍利法を修する目的で作成されたと考えるのが妥当であろう。

### 結びにかえて―今後の課題

以上、小野三流の舍利法の本尊である金輪仏頂が表された舍利容  
 器について考えてきたが、金輪仏頂と舍利との結びつきは小野三流  
 に始まるものではなく、すでに唐時代には確認することができる。  
 それを具体的に示す例が法門寺（陝西省扶風県）の地下宮より発見さ  
 れた八重舍利宝函のうちの第四重目の金銅函である。この金銅函は  
 立方体に近い箱形の舍利容器で、側面の正面側に如意輪観音像、背  
 面に大日金輪像、向かって右の面に釈迦如来像、左側に薬師如来像  
 をそれぞれ群像で表している。<sup>(6)</sup> 如意輪観音と大日金輪が舍利と関連  
 の深いことは先に述べたとおりであるが、既にこの時期に根津美術

館所蔵の大日金輪像を連想させる如意輪観音と大日金輪という組み  
 合わせが見られることは興味を持たれる。また、この第五重目の金  
 銅函の蓋表には八角輪宝を中心に迦陵頻伽や金剛鈴を表した文様も  
 見られるなど、八重舍利宝函には随所に金輪仏頂を意識した意匠を  
 見ることができるのである。本品が作成された懿宗（治世八六〇〜八  
 七四）の時代、既に舍利は金輪仏頂と深い関連を有していたことを  
 知ることができる。

また、金輪仏頂を描いた図像の一つ、大仏頂曼荼羅も唐時代にお  
 ける舍利と金輪仏頂との関連を示す作品に数えることができる【図  
 13】。大仏頂曼荼羅は大仏頂法の本尊とされた曼荼羅で、画面中央  
 に波間から突き出た岩に坐す大日金輪を表わし、その上に釈迦金輪  
 を描いている（奈良国立博物館本（重文、平安時代）では大日金輪と釈迦  
 金輪を同じ大きさで表すが、『覚禅鈔』本など釈迦金輪をひとまわり小さく



図13 大仏頂曼荼羅（奈良国立博物館）

表す例もある)。両尊の周囲を金輪仏頂が有するという七つの宝（七宝）、すなわち輪宝、珠寶、女宝、馬宝、象宝、主藏宝、主兵宝が取り巻き、大日金輪の左右には牡丹や竹が見える。波間の左方には七頭を有する龍、右方には九頭を有する龍がそれぞれ黒雲にのって金輪像に向かって登らんとするさまを描いている。

この曼荼羅の図像的な特徴のうち舍利信仰という観点から注目すべきことは、大日金輪と釈迦金輪が同体として表現されていること、そして両尊の下方に双龍が見えることである。まず、大日金輪と釈迦金輪との関係であるが、この曼荼羅の本尊は画面構成から判断して大日金輪であることは疑いない。しかし、奈良国立博物館本では釈迦金輪が大日金輪の頭上において同じ大きさで表されているため、両尊が同体であることが強く感じられる。また、『覚禪鈔』本などでは大日金輪の頭上にひとまわり小さい釈迦金輪が出現しているが、これは釈迦金輪を大日金輪の本地仏的な存在として表現したものと考えるだろう。本図に見られる両尊の同一性は『大陀羅尼末法中一字心呪経』に説かれるもので、これが小野三流の舍利法にとって重要な教義であったことは先に述べたとおりである。

双龍については、『二字仏頂輪王経』巻一「画像法品」に説かれる龍王にあたるとする指摘があるが、問題は「画像法品」には金輪仏頂を圍繞する仏、菩薩、天王が数多く説かれており、双龍はそのうちの一要素にすぎないことである。あえて双龍だけを取りあげ、他は省略した点に大仏頂曼荼羅において双龍が重要な意味を有することがうかがえよう。この問題を考える際、注目されることは大仏頂曼荼羅とよく似た表現の双龍が、宝珠法の本尊である摩尼宝珠曼荼羅にも見られる点である【図14】。この曼荼羅は『如意宝珠転輪秘

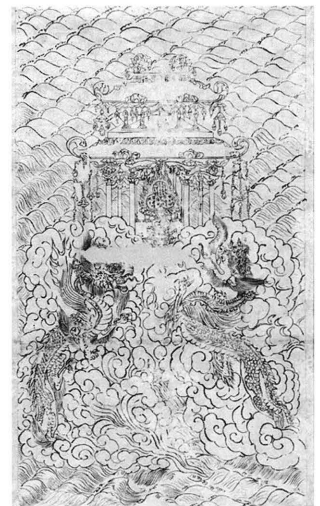


図14 摩尼宝珠曼荼羅  
(重文, 京都・仁和寺)

おき、その下方左右に黒雲を伴って宝珠殿に向かって登らんとする双龍を表している。大仏頂曼荼羅と比較すると、本尊の下方に双龍が対向するという構図が共通していることに気が付く。しかも、宝珠と龍という組み合わせが中国や日本の美術には頻繁に見られることを考慮すれば、大仏頂曼荼羅の本尊である大日金輪は宝珠（あるいは舍利）に見立てられている可能性が出てこよう。先に指摘したように、大日金輪と釈迦金輪を同体とする思想は小野三流の舍利法における重要な教義であり、しかもこの二尊は同流の舍利法の本尊であったことを考慮すれば、大仏頂曼荼羅に描かれた大日金輪と釈迦金輪は宝珠（あるいは舍利）としての意味が託された可能性は十分にあるのではなからうか。

大仏頂曼荼羅の成立については既に柳澤孝氏による詳細な論考があり、氏はこの図像が中国において阿闍梨の意樂いぎようによって創案され、日本にもたらされたと論じた【注7】。仮に中国で成立したとすれば、小野三流の舍利法の先鞭とも言える修法が中国においても行われていた可能性を示す一例となろう。元代にも仏頂尊を安置した舍利塔が作成されており、中国の歴史の中でしばしば舍利と仏頂尊との関連を物語る作品が見られる点は興味を持たれる。今後、日本の

密現身成仏金輪  
呪王経（大正蔵  
十九）に基づい  
て描かれたもの  
で、図像は中央  
に海上に出現し  
た摩尼宝珠殿を

舍利信仰との影響関係を検討する必要がある。

以上、小野三流の舎利法に関連すると推定される作品を取り上げ、その造形的な特色について考えてきた。本稿では金輪仏頂（あるいはその道場観）が表された舍利厨子や舍利容器を取りあげたが、わが国に残る舍利容器の多くは宝塔形、五輪塔形、宝篋印塔形などであり、そのような舍利容器は尊像が表現されたり法要に関する記録がある場合を除き、特定のホトケとの関連をうかがい知ることは難しい。しかし、当然このような舍利容器の中にも小野三流の舎利法に関連した作品は含まれていることであろう。舍利容器の遺例を見る限り、同流の舎利法に用いられたことが明かな作品は醍醐三流のそれに比較してかなり少ないが、わが国の多様な舍利信仰を物語る遺産として、その価値はきわめて高いと言うことができよう。

注

- (1) 拙稿「西大寺鉄宝塔・五瓶舍利容器について」(『佛教藝術』二五七号、平成十三年、毎日新聞社)
- (2) 月輪を有する不動明王像には、広島・浄土寺本堂(嘉暦二年＝一三二七再建)の来迎壁裏面に描かれた如意輪観音・不動明王・愛染明王図、同寺所蔵の五宝珠・不動明王二童子・愛染明王図にも見ることができ、この二作品とも如意輪・不動・愛染の三尊形式であることが根津美術館の大日金輪像と共通する。浄土寺は鎌倉時代後期に西大寺観尊の弟子である定證によって再建されて西大寺末となった。西大寺系寺院において如意輪・愛染・月輪を有する不動という特殊な形式が行われていたことがうかがえる。
- (3) 拙稿「密観宝珠形舍利容器について」(奈良国立博物館研究紀要『鹿園雑集』創刊号、平成一一年)
- (4) 西大寺末の西願寺(大阪住吉区)は大日金輪像を本尊とし、協侍に不

動明王像と愛染明王像をまつている。大日金輪像の胎内からは延享五年(一七四八)の紀年のある願文が発見されており、制作年代を知ることができる。願文には「宝珠即種子、種子即本尊」という大日金輪を宝珠に見なす文句も見ることができ、近世の作例ではあるが、醍醐流の流れを汲む西大寺派寺院において金輪仏頂、不動、愛染という三尊形式が存在したことを示す貴重な例である。(以上は西願寺の飯田友子氏のご教示による)

- (5) 蓮華座のしべを一本ずつ金銅で作る例は、ほかに奈良国立博物館の所蔵する重文・愛染明王像、西大寺所蔵の国宝・金銅透彫舍利容器がある。この愛染明王像は建長八年(一二五六)に観尊の高弟である寂澄が願主となり仏師快成に作らせた像である。また、金銅透彫舍利容器はもと大安寺舍利殿に安置されていたものであるが、観尊が発願したものとする説がある。海龍王寺の金銅火焰宝珠形舍利容器を含め、このしべの表現が観尊のかかわった作品に見られることは興味深い。
- (6) 法門寺博物館館長の韓金科氏は、『法門寺文化史』(五洲伝播出版社、一九九八年)の中で第四重目の金銅函の側面に見える釈迦如来像を「釈迦金輪曼荼羅」であると述べている(下巻七一頁)。氏はこの図に見える釈迦如来、および周辺の諸像が密教像であると認め、これを釈迦金輪曼荼羅であると推定されている。しかし、釈迦如来像には釈迦金輪像の特徴は認められず、また諸像にも特に密教的な要素は見られない。

- (7) 柳澤孝「日野原家本大仏頂曼荼羅について」(『美術研究』二八五号、昭和四十七年)

(ないとう さかえ 当館工芸室長)

〔編集委員〕

内藤 榮

谷口 耕生

〔英文翻訳〕

マリサ・リンネ

〔写真協力〕

一乗寺

海龍王寺

興福寺

醍醐寺

東大寺

仁和寺

ボストン美術館

宮内庁正倉院事務所

東京国立博物館

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

根津美術館

(株)飛鳥園

(敬称略、順不同)

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第四号

平成十四年三月三十一日発行

編集発行

奈良国立博物館  
奈良市登大路町五〇番地

印刷

株式会社天理時報社  
天理市稲葉町八〇番地

## RELIQUARIES USED IN THE KINRIN BUTCHŌ-HŌ RITUAL

NAITO Sakae

Nara National Museum

The Ono Branch (J., Onoryū) of the Shingon Sect of Esoteric Buddhism, based at the Kyoto temples of Daigo-ji and Kajū-ji, was the center of activity for relic (J., *shari*) and wish-granting-jewel (J., *hōju*) rituals in the Heian (794–1185) and Kamakura (1185–1333) periods. The branch comprised two parts, each made up of three sub-branches. Within the dominant three Daigo sub-branches (J., Daigo Sanryū), it was common for relics and wish-granting jewels to be regarded as the same thing, with relics being worshiped as wish-granting jewels in wish-granting-jewel rituals. In contrast, the three Ono sub-branches (J., Ono Sanryū), based at Kanju-ji, had the more unusual view that relics and wish-granting jewels are different entities. They saw relics as being manifestations of the Sanskrit letter symbolizing the buddha Kinrin Butcho (or Ichiji Kinrin), as described in the sutra *Dai darani mappōchū ichiji shinju kyō* (Ch., *Ta tuoluoni mofazhong yizi xinzhou jin*), with the power to save sentient beings. Accordingly, the most important ritual for the three Ono sub-branches was the Kinrin Butchō-hō, in which the main icons of worship were paintings of Kinrin Butchō.

This article proposes that the Nara National Museum's *Shrine with Reliquary and Ornamentation of a Stupa for the Hōkyōin darani* (Karanda mudra dharani) (Kamakura period), the Nezu Institute of Fine Arts' *Dainichi Kinrin* (*Mahavairocana of the Golden Wheel*) (Kamakura–Muromachi period), and Kairyūō-ji's *Reliquary in the Shape of a Flaming Wish-Granting Jewel* (Kamakura period) were used in the relic rituals of the three Ono sub-branches and discusses the distinctive characteristics of each.

Though few extant objects can be associated with the three Ono sub-branches, they are unique within the body of works used to ornament and glorify Buddhist relics. Such pieces bespeak the diversity of Japanese relic worship in Kamakura period.